

師団通信小隊長の中国参戦記

島根県 金 築 富 雄

私は大正十二（一九二三）年五月二十二日、島根県で生まれました。出雲電気株式会社（今の中国電力）に勤務していた父と、母と長男の私に妹二人と第一人の六人家族でした。昭和十六（一九四一）年三月、旧制県立大社中学を卒業し、担任の先生の知人がいる東京の日本電気の川崎工場に就職しました。日本電気は住友系で米国資本も入っており、米人重役が二人おりました。工場では真空管、通信機械を作っており、口本最初の電話器もこの会社の製品です。

初任給は五十円で、当時の小学校の校長の給料も五十円でしたから相当の高額でした。午前中は勤務ですが午後は学校に通わせてもらいました。軍の指定工場になっていて、管理官には陸軍中将以下中尉、少尉はゾロゾロおりましたので、将校なんて偉いと思っ

ませんでしたのが、いざ軍隊に入ったら上等兵でも神様より偉いのですから、私の甘い考えはいっぺんに吹っ飛んでしまいました。

昭和十八年、兵隊検査の結果甲種合格となり、十二月十日、浜田の西部第三部隊第七中隊（通信隊）に入隊、二日後には中支派遣の第三十九師団歩兵第二三二連隊に転属となり、毎日、浜田の海岸で行軍の準備のための歩行訓練などで走らされました。今まで会社勤務だったのに、ここでは朝から晩まで走り続けて足が棒のようになりました。

海岸から兵舎に帰るのに、へとへとで足が前に進まず、軍隊というところは何といやなところだと思うのと、上等兵があまりに威張るから、これでは自分も幹部候補生を受けて将校にならなくてはと考えが決まりました。それまでは入隊前に少尉さんが技術の勉強で数人おられ、日常対等に会話を交わしておりましたので軍人もたいしたことはないと思っておりましたし、自分も甲種合格しておるが早く帰り働きたいと思っ

いたため踏ん切りがつかなかったのです。

十二月十二日早朝、浜田連隊は出発しました。私の家族は全員浜出駅に見送りに来てくれましたが、多くの兵隊は出発の時間が分からず家族と会えませんでした。父の友人の家族も遅れたために息子と会えず非常に残念がって、私に当時のお金で五十円、息子に会えたら渡してくれと頼まれました。子を思う親の心思うと、今でも気の毒に思います。その息子さんにはお金を中支で渡しましたが、その後、気の毒にも戦死されました。

翌二十三日、下関港で乗船出発、船は日本海を進み、内地がだんだん小さくなり、かすんで見えなくなった時、「ああ、これが日本の見納めか」と思った時の気持ちは、今も忘れることは出来ません。二十四日、釜山に上陸しましたが、当時は日本人も多数おり異国の感じはしませんでした。直ちに列車に乗り出発して北上、二十六日、山海関を通過し、浦口を通過して南京に到着しました。南京城内の宿舎で昭和十九年の正月を迎え、餅を食べ、おとそを飲みました。

この宿舎で先の息子さんを捜して浜田駅の様子を話し、預かっていたお金を渡すことが出来安心しました。

昭和十九年一月、南京から軍用船で漢口に向かい揚子江を上って行きましたが、重慶から飛んできた中国の戦闘機の機銃掃射を受けました。幸い被害はなく数日かかって漢口に上陸、目的地である連隊の駐屯地当陽に向けて徒歩行軍の開始、途中空き家になった民家に泊まり、七日がかりで当陽に到着しました。

この輸送期間中の、引率は桑原中尉と中島伍長で、私が分隊長を命ぜられ、通信隊に入る兵隊数人の世話をさせられました。途中、敵の民兵の夜襲の銃声に緊張したのを覚えています。この当陽で私達の初年兵教育が始まったのです。

四月に入ると幹部候補生の試験を控え、四人が教官である井原少尉の自室で受験勉強に励みました。五月十日、私一人が甲種幹部候補生に合格、上等兵となり、下旬には第三十九師団通信隊に集合、他隊の甲幹生と共に集会教育が始まりました。

昭和十九年六月十日、兵長に昇進。内地の浜松通信学校に入学する予定でしたが、状況悪化を理由に南京に変更され、内地に帰れる夢が破れ残念でした。南京予備士官学校は南京城外の旧中国軍官学校を利用して、卜士官教育をするのですが、南京城外飛行場が傍らにあったので空襲が度々ありました。

八月十日、予備士官学校に入校、伍長に任官、十二月十日、軍曹に昇進、学校での毎日の訓練は初年兵教育とは比較にならない厳しい毎日の連続でした。中隊長は陸軍士官学校出身の二十五歳で少佐になるくらい優秀な人で、厳しいことこの上もありませんでした。

教育期間中に分隊長、小隊長の役を命ぜられ、各自がこれで点がつけられるので一生懸命でした。

通信隊には馬がおり、朝、まず馬の手入れて、冬は足を洗うのに用いる鉄の棒が手に凍りつくほどでした。その後で朝食があり終われば食缶洗い、そして演習です。南京も雪が多く降りました。学校に神社があり、禊一枚で正座であるから寒いどころではなく、身体が凍りつくようでした。中隊長は士官学校に比較す

ればやさしいものだといっているので何も言えません。

風邪をひいたと言えば完全軍装で一周一キロある行程を十周しなければならず、またそれで風邪は治るのです。要は氣迫であると現在は思っております。

昭和二十年四月二十九日、新設された第一三二師団通信隊に転属（学校在学中）しました。原隊である第三十九師団は関東軍強化のため満州に向かい行軍中でした。今思えば、あの時転属になっていなければ終戦時ソ連に抑留されるところでした。初年兵仲間でソ連に連れていかれて病死したものが多くいます。

六月三十日、南京予備士官学校を卒業（十カ月間）、見習士官となり、転属先の第一三二師団に向かい南京を出発、漢口にて歩兵隊員を通信兵にするための教育指導官に任命され、同時に陸軍少尉に任官、第一三二通信隊の小隊長を命ぜられました。一カ月ほど教育して原隊の前線に帰そうと思うのですが、歩兵隊の兵士が前線に帰るのを嫌って漢口で慰安婦と心中するといふ不祥事が数件も発生、中隊長の病死という判断で処

置したことがあります。

通信隊の任務は作戦を成功させるためには極めて重要であり、暗号によって電文は組み立てられます。東京の参謀本部で決定する作戦は、無線で指揮系統に従い各部隊に伝達されます。暗号はすべて数字で暗号書によって文字にされます。暗号の解読は軍の運命を左右します。日本が負けたのは米国に暗号を解読され、政策、外交、軍事すべてが筒抜けになっていたからだと戦後判明しました。

通信隊にも軍、師団、連隊通信隊とそれぞれあって、軍通信隊は軍司令部と師団司令部の連絡を、師団通信隊は師団司令部と連隊本部の連絡を受け持ち、戦闘があっても空襲だけが心配で、安全といえば比較的安全ですが連隊の通信隊は連隊本部と大隊、中隊の連絡であり、特に有線通信隊は延線しなくてはならないので危険度が高くなります。無線はその点、安全な地点で開設するから良かったのです。

初年兵教育期間中討伐があり、演習を兼ねて一緒に

出た事があり、不安でならなかったことを今でも思い出すと汗が出るようです。

終戦の一週間くらい前から、漢口の市民の間には「日本が負けて降伏する」との情報が流れていて「お前たちはもう帰れ」と誹謗されました。軍通信隊には終戦の数日前から知らされていました。私等もまさかと思っていきましたが、親しい戦友（師団将校）達は軍刀、銃剣、馬等武器があるし、東京、広島等内地はもう駄目だから、現地で馬賊になろうと無線で連絡し合っていたのですが、それもやはり家族のことを思うと出来ませんでした。

昭和二十年十一月十五日、漢口第六戦区戦俘第一管理所第一分隊小隊長となりました。漢口兵舎に在任中に中国第八路軍が進駐して来ました。この時私達はまだ武装解除されておらず、この軍隊に負けたのかと残念でならなかったものです。この第八路軍の司令官は可應欽中將で東條大将と陸士同期の人だそうです。共産軍の勢力が強いので中国軍から頼まれて、日本兵が

応援の形で歩哨に立ったことがありました。

中国軍の方から通信兵の教育をして欲しいと依頼があり、中隊長より私が教官となるよう命ぜられ教育に当たりましたが、日本兵と違い中国兵は学校に行っておらず、下士官級の者でも日本の小学生に劣る能力しかなく、一カ月以上教育したのですが駄目でした。有線の交換器の操作も出来ず、ましてや無線の電鍵の操作など全く無理な話で、ほとほと困ったものでした。

次に命ぜられたのが、武昌から武漢大学までの道路復旧作業と日本軍が陸軍病院に使用していた武漢大学の復旧作業でした。その間、中国軍の少尉が一人奥さん同伴で監督についておりました。

日本軍の食糧は武昌まで兵士が肩に担いで受領に行くので、一日掛かりの大変な仕事でした。風呂は無くドラム缶にクリークの水を汲んで沸かしました。この作業期間中に栄養失調で兵二人が病死しました。この死体の守りを嫌がって世話してくれないので、私が隣で寝ておりました。火葬するのに焚く物が少ないので、指を数本切って、その辺の枝木を集めて焼き、死

体は狼に食われないように穴を深く掘って埋めました。引揚げ時、骨は日本に持ち帰りました。

漢口の管理所（収容所）にいる間にも栄養失調で多くの兵士が病死しました。武器の引き渡しは終戦後しばらくたった後で、私は日本刀の鞘の中に醬油を入れて刀が抜けないようにして渡しました。また可應欽は日本兵の捕虜を解放してくれたので一緒に帰国しましたが、生きていた英霊と騒がれたものです。

昭和二十一年五月、漢口の管理所（収容所）を出発、無蓋貨車に乗り北支回りで上海に到着しましたが、途中、中国兵に何か品物を渡さないと列車を走らせないので、将校である私は目をつけられ、着ている服だけが残った始末でした。

六月一日、上海の飯田栈橋から米軍上陸用船艇に乗せられ、途中暴風雨に遭い、一週間後ようやく本土博多に到着しました。途中数人が病死しましたが、祖国日前の死は何とも気の毒に思いました。

六月九日、博多着停泊、検疫待ちの間に本土の灯り

を見て安心したのか二人が死にました。上司としては残念でした。若い日本の女性がアメリカ兵にベタベタしている姿を見て、情けない思いがすると同時に怒りが湧いてきました。

家族の喜びに迎えられて出雲の自宅に帰り、無事生還できた幸運を感謝しました。東京の日本電気にも挨拶せねばと上京しました。私は東京で勤めたいと思いましたが、父の定年が間近でもあり、家族のこともあり、止むなく父の勤務先である中国電力のお世話になることになり、以来無事定年を迎え、現在に至っております。

第一線の衛生兵

愛媛県 和田 富海男

私は長男で、任生川で出生しました。第一人妹三人の七人家族で、生活程度は、当時はどこの家も負しく、わが家も同様でした。父親は早朝から夜まで働い

ていました。仕事は町役場の雇員で、衛生部門を担当し、各家庭からの汚物塵芥の処理を行っており、馬車を使って所定の場所に搬送していました。時には他の町の方の遠い所にも行っていました。母親は弟妹の面倒を見ながら少しの畑（菜園）を作っていました。

今、思い起こしても、両親はただ一生懸命に子供を育てていてくれたと心から感謝しています。

家の前の道路は二メートルくらいの幅で直線路でした。その前側は石垣で、その下を新川という清流があつて、小魚がたくさん泳いでいました。いろんな方法で漁獲し、家計の一助になればとよくとりました。

この川の源は関西一の名峰石槌山です。当時、そのままで飲料水になる清水でした。今は汚れて駄目になりました。

近隣の人達は人情厚く、他家の子供も自宅の子供と同様に分け隔てなくかわいがり、時にはしかられました。また時には、身体の鍛錬と精神の修養だと言って青年会の人達に引率され、日の丸弁当を持参して、伊予小松駅まで汽車に乗り、そこから石槌山へ登りまし